

## 論文

### 經濟と政治との関連の問題（一）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山本 二三丸

一

一般に、經濟が政治を規定する、といわれている。諸条件の複雑な組合せのもとでは、——とくに過渡期においては、——政治が經濟を規定することもあるが、しかし、究極的には、經濟が政治を規定するということは、争えない事実と考えられる。このことを、ある個人の社会的な政治活動にあてはめてみたばあい、もし彼が、科学的社會主義といわれるマルクス主義の立場をとっているならば、彼の政治活動の方針は、彼のもっている經濟理論とそれによる一國の社會經濟的分析によつて規定されている、ということができよう。政治は階級闘争の場面であり、階級分析はすぐれて經濟的分析に依存しているからである。しかし、實際には、同じくマルクス主義の立場をとるとい

ながら、政治活動の方針がまったく相反する場合も、しばしば見られる。經濟が政治を規定するという、いわば一個の「法則」が、個人の頭脳の中では、いいかえれば、個人がその客觀的事實を把握するさいに、なぜそのまま「貫徹」しえないのか、ということが問題となる。同じマルクス主義に立脚しながら、なぜ、政治の方針が相反するのかわ？——これにたいする答えは、おそらく、遑って、一国の社会に經濟的分析の仕方、マルクス主義の經濟理論の適用の相違、したがってまたその把握の相違のなかに、そして、とどのつまりは、マルクス主義の基本そのものの把握の相違の中に求められなければならないであろう。もしマルクス主義理論——とくに經濟理論——の正確な把握と正しい適用とが厳密に限られたものであって、個々人のそれぞれの主觀的判断によって種々様々に変わりうるものであってはならないとするならば、——そして、およそ客觀的法則が問題であるかぎり、それ以外ではありえないのは当然であるが、——政治の方針における正否は、逆に、そのひとのマルクス主義理論の正確な把握とその正しい適用における正否に直接結びついており、またそれをあらわすものとみなされるべきである、ということができよう。

こうした、いわば個人の頭脳の中における「經濟と政治との関連」という問題をいささか考えてみようというのが、この抽論の課題であって、そのために材料としてとりあげられたのが、L・トロツキーの所論である。トロツキーは一般にマルクス主義者と呼ばれており、彼もその自伝『わが生涯』の中で、そのことを明記している。その中ではまた、「シベリアで、マルクスの經濟学体系を学ぶことに忙殺されていた」と述べられ、レーニンの二著、『なにをなすべきか』と『ロシアにおける資本主義の發展』を勉強したということが記されている。彼が一九一七年十月革命を目前にしてレーニンのポリシェヴィキ党に「合流」したことはよく知られているが、しかし、レーニンの諸論文と諸活動とを系統的にながめ、またトロツキーの同じく諸著作と諸活動とを系統的にながめて、両者をざっと比較し

てみたところでも、両者の間のへだたりはきわめていちじるしいものがあるように見受けられる。理論的活動も実践的・政治的活動も、同質のものよりも、むしろ異質のものの方が支配的であるように感ぜられるのである。そこで、これからしばらくのあいだ、トロツキーの文章をとりあげて、その理論的内容および実践的意義を考察することによって、トロツキーその人における「経済と政治との関連」をさぐってみたいとおもう。とくに、同じ主題にかんするレーニンの所論との対比を通じて、はたして、トロツキーがマルクス主義の基本そのものの正確な把握と正しい適用という根本問題において、ただしくマルクス主義者の名に値する実績をわれわれにのこしていくるかどうかという点に、この考察の一点が置かれるべきであることは、いうまでもない。

ところで、こうした考察にとって役立ちうるものとしては、「合流」以前に書かれたもので、レーニンの所論ときわだつた対立を示しているものが、もっとも適当である。とりわけ「合流」以後のものは、種々の政治的考慮が先きになつていて、「経済と政治との関連」を考察するには不適當のものが多いようである（とはいへ、「合流」以後のものでも、参考になりうるものもあるので、行論で必要があるときはとりあげられるはずである）。最初にとりあげられるのは、トロツキーが、とくにドイツ社会民主党の理論的機関誌「ノイエ・ツァイト」(„Neue Zeit“) 一九一〇年第五〇号に発表した論文、『ロシア社会民主主義派の発展諸傾向』(„Die Entwicklungstendenzen der russischen Sozialdemokratie“) である。この論文の書かれた一九一〇年は、ロシア第一革命(一九〇五—一九〇七年)期につづく反動期にあつており、ロシアのマルクス主義者、社会民主主義派はいずれも、この反動期をいかにたたかぬかかということに切実な関心をもっていたものである。だが、この反動期における闘争の方針は、第一革命そのものの過程(内容と結果)の評価にむすびついており、したがってロシア革命全体の評価とそこから導き出される闘争方針な

るものと緊密にむすびついているものである。そこで、トロツキーの論文を紹介するまえに、ロシア革命を成功的に遂行したレーニン自身の筆をかりて、当時の歴史的背景についての大体の観念をつかんでおくことにしよう。

一九二〇年六月に公けにされた名著『共産主義内の「左翼主義」小児病』のなかで、レーニンは、とくにその「第三節」を「ポリシェヴィズムの歴史のおもな段階」と題して、「革命の準備時代（一九〇三—一九〇五年）」、「革命の時代（一九〇五—一九〇七年）」、「反動の時代（一九〇七—一九一〇年）」、「高揚の時代（一九一〇—一九一四年）」、「第一次世界帝国主義戦争（一九一四—一九一七年）」、「ロシアの第二次革命（一九一七年二月から十月まで）」に分けて説明しているが、その中から、当面関係あるものとおもわれる個所をつぎに引用してみよう。

「革命の準備時代（一九〇三—一九〇五年）。いたるところで大きなあらしの近づいていることが感じられる。あらゆる階級に動揺と準備活動が見られる。国外では亡命家の新聞が、革命のすべての基本問題を理論的に取りあげる。三つの基本的階級、三つの主要な政治的潮流、すなわち自由主義的ブルジョアの潮流、小ブルジョア民主主義（「社会民主主義的」および「社会革命的」な流派の看板でかくされた）の潮流、革命的プロレタリアの潮流の代表者は、綱領上、戦術上の見解のこのうえなく激しい闘争によって、きたるべき公然の階級闘争のさきがけとなり、それを準備する。一九〇五—一九〇七年と一九一七—一九二〇年に大衆の武装闘争の原因となったすべての問題は、萌芽の形で当時の出版物にたどることができ（またそうしなければならぬ）。だが、これらの三つの主要な流派のあいだに、中間の、過渡的な、どっちつかずの組織がいくらかでもあることは、いうまでもない。もっと正確にいえば、機関紙、政党、分派、グループの闘争のなかで、真に階級別の思想的・政治的流派が結晶していき、各階級は、きたるべき戦闘のために適当な思想的・政治的武器をきたえる。

革命の時代（一九〇五—一九〇七年）。すべての階級が公然と登場する。すべての綱領上、戦術上の見解が、大衆の行動によって点検される。ストライキ闘争は、世界にかつてなかったほど広範で、激しいものとなる。経済的ストライキは発展して政治的ストライキとなり、政治的ストライキは発展して蜂起となる。指導するプロレタリアートと、指導される、動揺し、ぐらついている農民との相互関係が、実践によって点検される。闘争の自然発生的な発展のうちにソヴェトという組織形態が生まれる。ソヴェトの意義についての当時の論争は、一九一七—一九二〇年の偉大な闘争のさきがけをなしている。議会的闘争形態と議会的でない闘争形態との交替、議会活動をボイコットする戦術と議会活動に参加する戦術との交替、合法的な闘争形態と非合法的な闘争形態との交替ならびに両者の相互関係と関連、——これらはすべて、その内容が驚くべく豊かなことを特色としている。政治科学の基礎を、大衆にも、指導者にも、階級にも、党にも、教えこんだという点で、この時期のひと月は、「平和な」「立憲的」発展の一年に等しかった。一九〇五年の「総稽古」がなかったならば、一九一七年の十月革命の勝利は、不可能であつたらう。

反動の時代（一九〇七—一九一〇年）。ツァーリズムが勝利した。すべての革命党と反政府党は粉碎されてしまった。凋落、士気沮喪、分裂、離散、背教、好色文学が政治にとってかわった。哲学的観念論への傾きがよくなる。神秘主義が反革命的な気分をかくす着物となる。だが同時に、大きな敗北こそ、革命的諸政党と革命的階級に、ほんとうの、きわめて有益な教訓、歴史の弁証法の教訓、政治闘争をどうおこなうかの理解と手腕と技倆についての教訓を、あたえるものである。友は不幸なときに知られる。敗軍はよくまなぶ。

勝利したツァーリズムは、ロシアの前ブルジョア的・家父長制的な生活様式の遺物を、早急に打ちこわすことをよぎなくされた。ロシアのブルジョアの発展は、いちじるしく急速度で前進する。資本主義を避けることができるとい

う、非階級的・超階級的な幻想は消しとんでしまう。階級闘争は、まったく新たな形をとって現われ、そのために  
 そう明瞭になる。

革命的諸政党は、徹底的に学ばなければならない。革命的諸政党は攻撃の仕方を学んだ。いまや、この科学を、も  
 っと正しく退却する仕方の科学で補うべきだということを、理解しなければならぬ。正しい攻撃と正しい退却とを  
 学ばずには、勝利することはできないということを、理解しなければならぬ、——そして革命的階級は、自身の苦い  
 経験によって、それを理解することを学ぶであろう。打ちやぶられたすべての反政府党や革命的政党のうちで、ポリ  
 シェヴィキは、退却にあたって、秩序はもつとも正しく、その「軍隊」の損害はもつともすくなく、軍隊の中核はも  
 っとも多く保存されており、分裂は(深さと不治の程度の点からみて)もつともすくなく、士気沮喪はもつともすく  
 なく、きわめて広範に、正しく、力強く活動を再開する能力はもつとも多かつた。そしてポリシェヴィキがこのこと  
 をやりとげたのは、退却の必要があること、退却するすべを知る必要があること、もつとも反動的な議会のなかで、  
 もつとも反動的な労働組合、協同組合、保険組合等々の団体のなかでも合法的に活動するすべをせひとも学ぶ必要が  
 あることを、理解しながらなかつた口先だけの革命家を、容赦なく暴露し、追いだしたからにはかならない。

高揚の時代(一九一〇—一九一四年)。はじめ、高揚は、信じられないほどのろろしていたが、のちに、一九一  
 二年のレナ事件後には、いくぶん早くなつた。未曾有の困難に打ち勝つて、ポリシェヴィキは、メンシェヴィキをお  
 しのけたが、労働運動内のブルジョアの手先としてのメンシェヴィキの役割は、一九〇五年以後にブルジョアジー全  
 体がひじょうによく理解していたところであつて、それだからこそブルジョアジー全体が、ポリシェヴィキに反対し  
 たメンシェヴィキを、あらゆるやり方で支持したのである。しかし、非合法活動と、「合法的可能性」をかかならず利

用することとを結びつけるという正しい戦術をとらなかつたなら、ポリシェヴィキは、メンシェヴィキをおしのけることに成功しなかつたであらう。ポリシェヴィキは、もつとも反動的な国会で労働者クーリヤ全部を獲得したのである」(全集第四版、第三十二卷、一〇—一二ページ、傍点—レーニン)。

なお、レーニンの率いるポリシェヴィキがロシア社会民主主義派内部のどのような潮流と闘争してきたかという、歴史的過程の大体を知っておく必要があるので、レーニンが一九一五年に書いた有名な論文、『社会主義と戦争(戦争にたいするロシア社会民主労働党の態度)』の第四章「ロシアの社会民主主義派の分裂の歴史とその現状」の中から、関係箇所をぬきだして、つきにかけておくことにしよう(……は中略の部分を示す)。

「思想上の一潮流としての社会民主主義派は、「労働解放」団が外国ではじめて、ロシアに適用した社会民主主義の見解を系統的に述べた一八八三年に成立した。九〇年代の初めまでは、社会民主主義派はロシア国内の大衆的な労働運動と結びつかず、思想上の一潮流にとどまっていた。九〇年代の初めに、社会的高揚と、労働者のあいだの激動とストライキ運動とが、社会民主主義派を、労働者階級の(経済的ならびに政治的な)闘争と切りはなせないように結びついた、活発な政治勢力とならせた。そして、まさにこの時から、「経済主義者」と「イスクラ派」とへの社会民主主義派の分裂がはじまった。

「経済主義者」と旧『イスクラ』(一八九四—一九〇三年)

「経済主義」は、ロシア社会民主主義派内の日和見主義的な一潮流であった。その政治的な本質は、「労働者は経済闘争を、自由主義者は政治闘争を」という綱領に帰着するものであった。経済主義の主要な理論的支柱となっていたのは、いわゆる「合法マルクス主義」または「ストルーヴェ主義」であって、これは、あらゆる革命精神をとりぞ

り、自由主義的ブルジョアシーの要求に適應させられた「マルクス主義」を「承認していた」。「經濟主義者」は、ロシアでは労働者大衆が未発達だということを理由として、「大衆とともにすすむ」ことをのぞみ、労働運動の任務と規模を經濟闘争と自由主義派への政治的支持とにかぎろうとし、独自の政治的任務をも、いかなる革命的任務をもとりあげなかった。

旧『イスクラ』（一九〇〇—一九〇三年）は、革命的社會民主主義派の原則のために「經濟主義」と闘争して勝利をえた。自覚したプロレタリアートの精華は、みな『イスクラ』の味方となった。革命の数年前に、社會民主主義派は、もっとも首尾一貫した、非妥協的な綱領をかかげて立ち現われた。そして、一九〇五年の革命当時の階級闘争、大衆行動は、この綱領の正しかったことを確証した。「經濟主義者」は、大衆の後進性に自分を適應させていた。『イスクラ』は、大衆を前方へ導いていくことのできる労働者の前衛を教育した。今日の社會排外主義者の論拠（大衆を考慮に入れる必要についての、帝國主義の進歩性についての、革命家の「幻想」等々についての）は、すべて、經濟主義者がすでにかかげていたものである。マルクス主義を日和見主義的につくりかえて「ストルーヴェ主義」とすることは、ロシアの社會民主主義派には、二〇年もまえからおなじみのことである。

メンシエヴィズムとポリシエヴィズム（一九〇三—一九〇八年）

ブルジョア民主主義革命の時期は、社會民主党の内部に諸潮流の新しい闘争を生み出したが、それは以前の闘争の直接の継続であった。「經濟主義」は「メンシエヴィズム」に姿をかえた。旧『イスクラ』の革命的戦術の堅持は、「ポリシエヴィズム」を生みだした。

一九〇五—一九〇七年のあらしの数年には、メンシエヴィズムは、自由主義的ブルジョアの支持をうけ、労働運動



内に自由主義的ブルジョアの傾向をつたえた日和見主義的な一潮流であった。労働者階級の闘争を自由主義派に適応させること——ここにメンシェヴィズムの核心があった。これに反して、ポリシェヴィズムが社会民主主義的労働者の任務としたのは、自由主義派の動揺や裏切りにさからって、民主主義的な農民を革命的闘争に立ちあがらせることであった。そして、メンシェヴィキ自身がいくたびかみとめたように、労働者大衆は、革命時には、あらゆる巨大な行動のさいにポリシェヴィキとともにすすんだ。

一九〇五年の革命は、ロシアにおける非妥協的に革命的な社会民主主義的戦術を検証し、つよめ、ふかめ、きたえた。諸階級と諸政党との公然たる行動は、社会民主主義的な日和見主義〔メンシェヴィズム〕と自由主義との結びつきを、いくたびとなく暴露した。

#### マルクス主義と解党主義<sup>(1)</sup> (一九〇八一—一九一四年)

「反革命の時期は、社会民主主義派の日和見主義的戦術と革命的戦術との問題を、またもや、まったく新しい形で日程にのぼせた。メンシェヴィズムの主流は、その多くの最良の代表者たちの抗議にもかかわらず、解党主義の潮流を、ロシアにおける新しい革命をめざす闘争の否認、非合法組織と非合法活動との否認、「地下活動」や共和制のスターガンにたいする嘲笑、等々を、生みだした。以前の社会民主党から独立した一つの中核が、雑誌『ナーシャ・ザリヤー』の合法的文筆家グループ(ポトレンツフ氏、チェレヴァーニン氏など)という形で結集し、労働者に革命闘争を棄てさせようとのぞんでいたロシアの自由主義的ブルジョアジーによって、ありとあらゆる方法で支持され、吹聴され、あまやかされた。

一九一二年のロシア社会民主労働党の一月協議会は、この日和見主義者のグループを党から排除し、大小の幾多の

在外グループの猛烈な反抗を退けて、党を再建した。二年以上（一九二二年初めから一九一四年の半ばまで）にわたって、二つの社会民主主義政党のあいだに、すなわち、一九二二年一月に選ばれた中央委員会と、一月協議会をみとめず、『ナーシャ・ザリヤー』グループとの統一を維持したままで別の形で党を再建しようとのぞんだ「組織委員会」とのあいだに、頑強な闘争がおこなわれた。二つの日刊労働者新聞（『ブラウダ』と『ルーチ』、およびそれらの後継紙）のあいだや、また第四国会の二つの社会民主党議員団（ブラウダ派すなわちマルクス主義派の「ロシア社会民主党労働者議員団」とチヘイゼを頭とする解党派の「社会民主党議員団」）のあいだでも、頑強な闘争がおこなわれた。「ブラウダ派」は、党の革命的な訓戒をあくまで忠実に守り、（とくに一九二二年の春以後に）開始した労働運動の高揚を支持し、合法および非合法の組織、出版物ならびに煽動を結合しながら、自覚した労働者階級の圧倒的多数を自分のまわりに結集した。他方、解党派は、——政治勢力としてはもっぱら『ナーシャ・ザリヤー』グループの形で活動しながら——自由主義的ブルジョア分子の全面的な支持にたよっていた。

マルクス主義と社会排外主義（一九一四—一九一五年）

一九一四—一九一五年のヨーロッパ大戦は、ヨーロッパのすべての社会民主主義者にも、ロシアの社会民主主義者にも、世界的規模の危機によって自己の戦術を検証する機会をあたえた。ツァーリズムのばあいには、この戦争が反動的、略奪的、奴隷所有者的な戦争であることは、他の国々の政府のばあいよりも、くらべものにならないほど明瞭である。それにもかかわらず、解党派の基本的グループ（自由主義者と結んでいたおかげで、わが党をのぞけば、ロシアで言うに足る影響力をもつ唯一のグループ）は、社会排外主義に転向してしまった！ かなり長いあいだ合法性を

独占していたこの『ナリシャ・ザリヤー』のグループは、大衆のなかで「戦争に反抗するな」とか、三国協商（いまでは四国協商）がわの勝利をのぞみ、ドイツ帝国主義の「常軌を逸した罪過」を非難する、等々の趣旨の宣伝をおこなった。一九〇三年以来、極度の政治的無定見と日和見主義への移行との見本をいくたびとなく示したブレハーノフは、もつとはっきりとこの立場をとって、ロシアの全ブルジョア出版物の賞讃を博している。ブレハーノフは、この戦争をツァーリズムのおこなう正義の戦争であると言明し、イタリアの御用新聞に同国の参戦をすすめるインタヴューをのせるまでに墮落したのである！

こうして解党主義にたいするわれわれの評価が正しく、解党派の主要なグループをわが党から排除したことが正しかったことは、完全に確証された。解党派の現実の綱領とこの流派の現実の意義は、いまでは一般に日和見主義の点にあるだけでなく、さらに彼らが大ロシア人の地主とブルジョアジーの大同的特権と優越性とを擁護している点にある。これは、国権的、自由主義的、労働者政治の流派である。これは、急進的な小ブルジョアの一部分と、特権的労働者のわずかな部分が、プロレタリアートの大衆に敵対して、「自」国のブルジョアジーと結んだ同盟である。

#### ロシア社会民主党内の現状

すでに述べたように、解党派も、幾多の在外グループ（ブレハーノフのグループ、アレクシンスキーのグループ、トツキーのグループ、など）も、いわゆる「非ロシア民族的」（つまり大ロシア人以外の）社会民主主義者も、一九一二年のわが党の一月協議会をみとめなかった。われわれにあげせられた数しれない罵言のうちでいちばん頻繁にくりかえされたのは、「篡奪主義」と「分裂主義」という非難であった。これにたいするわれわれの答は、わが党こそがロシアの自覚した労働者の五分の四を統合していることを証明する、正確な、客観的に点検できる数字をあげる

ことであつた。反革命期における非合法活動のあらゆる困難のもとでは、この数字はすくないものではない。

もしロシアで『ナーシヤ・ザリヤー』のグループを排除しないでも、社会民主主義的戦術にもとづく「統一」が可能であつたとすれば、数多くのわれわれの反対者が、彼らの仲間同士でさえ統一を実現できなかったのは、いったい、どういふわけか？ 一九一二年一月以来、たつぷり三年半もたつてゐる。そして、この全期間中に、われわれの反対者たちは、われわれに対抗して社会民主主義政党をつくらうと切望しながらも、それをはたすことができなかった。この事実、わが党をもつとも良く弁護するものである。

わが党とたたかう社会民主主義グループの歴史は、すべてが崩壊と解体の歴史である。一九一二年三月には、われわれにたいする悪口の点で、もれなくすべてのものが「統合した」ところが、はやくも一九一二年八月、われわれに対抗していわゆる「八月ブロック」がつくられたときには、すでに彼らのあいだでは解体がはじまつた。一部のグループが彼らから離れ去つた。彼らは党と中央委員会をつくることができなかつた。彼らは、「統一を回復するため」組織委員会をつくつたにすぎない。だが、実際には、この組織委員会は、ロシア国内の解党派グループの無力なかくれみのにすぎなかつた。一九一二年—一九一四年のロシアの労働運動の大きな高まりと大衆的ストライキとの全期間を通じて、八月ブロック全体のうちで、大衆のなかで活動していた唯一のグループは、やはり『ナーシヤ・ザリヤー』のグループであつたが、このグループの力は自由主義者との結びつきにあつた。そして、一九一四年初めには、「八月ブロック」からラトヴィアの社会民主主義者（ポーランドの社会民主主義者は同ブロックに入つていなかった）が正式に脱退し、このブロックの指導者の一人であるトロツキーは、非公式にこのブロックから出て、またもや独自のグループをつくつた。一九一四年七月には、ブリュッセルの会議で、国際社会主義ビューロー執行委員会の、

カウツキーとヴァンデルヴェルデの参加のもとに、われわれに対抗していわゆる「ブリュッセル・ブロック」がつくられたが、それにはラトヴィア人は加入せず、またポーランド社会民主党反対派はただちにそれから脱退してしまつた。開戦後、このブロックは崩壊した。『ナーシヤ・ザリヤー』、プレハーノフ、アレクシンスキー、カフカースの社会民主主義者の指導者アンは、公然たる社会排外主義者となつて、ドイツの敗北が望ましいと説いている。組織委員会とブンドは、社会排外主義者と社会排外主義の原則とを弁護している。チヘイゼ派議員団は軍事公債には反対投票したとはいへ（ロシアではブルジョア民主主義者のトルドヴィキでさえ、それには反対投票した）、依然として『ナーシヤ・ザリヤー』の忠実な同盟者である。わが国の極端な社会排外主義者であるプレハーノフ、アレクシンスキーの一派は、チヘイゼ派議員団にまったく満足している。パリで、『ナーシヤ・ザリヤー』、組織委員会、あるいはチヘイゼ派議員団との統一を無条件に要求することと、国際主義のプラトニックな擁護とを両立させようとのぞんでいゝる、マルトフとトロツキーを主要な参加者として、新聞『ナーシエ・スローヴォ』が創刊された。この新聞も第二五〇号を発行したのは、自己の解体を自分でみとめないわけにはいかなくなつた。すなわち、その編集局の一部はわが党の方に傾いており、マルトフは、『ナーシエ・スローヴォ』を「無政府主義」だといつて公けに非難している組織委員会（ちょうどドイツの日和見主義者のグヴィッド一派や『インテルナツィオナレ・コレスポンデンツ』やレギーン一派が、同志リーブクネヒトを無政府主義だといつて非難しているように）にたいして依然として忠誠を守つてゐる。トロツキーは組織委員会とは手を切ると言明したが、チヘイゼ派議員団とは行動をともしたいとおもつてゐる。

(注)

(注) ……トロツキーは最近、インターナショナルのなかでチヘイゼ派議員団の權威を高めることを自分の任務と考えてゐる、

と声明した。チヘンケリのほうでも、同じように精力的に、インターナショナルのなかでトロツキーの権威を高めようとするだろうということは、疑いない。」(全集第四版、第二十一巻、三〇一—三〇七ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本)。

(1) この解党主義 (Джквпартоство) については、当時レーニンがこれをどのように評価したかということを示すために、一九〇九年十一月に書いた彼の論文、『解党派のやり口とポリシエヴィキの党的任務』の中から、その冒頭のパラグラフを用いておこう。

「現在、わが党の際会している危機は、すでに再三述べてきたように、革命時に労働者階級の運動に加わったが、いまでは、一方の翼ではメンシエヴィキの解党主義に、他方の翼では召還主義に最後通牒主義におちいった小ブルジョア分子の浮動性によるものである。だから、二つの翼での闘争は、正しい革命的な社会民主主義的戦術を守りとおすために、また党を建設するために、必須の任務である。ポリシエヴィキ派は、この闘争をたゆむことなくすすめていて、それによって、真に党的な、真にマルクス主義的な、社会民主主義的なすべての分子をきたえ、結束させようとしている」(前出、第十六巻、七九ページ)。

ここに出てくる召還主義、最後通牒主義という言葉は、あとでトロツキーの論文の中にも出てくるが、その意味がとらえにくいので、邦訳第十六巻末尾につけられている注記をつぎに転載しておこう。

「召還派——ストルイビン反動期に第三国会から社会民主党議員を召還し合法組織内の活動を停止することを要求した一部のポリシエヴィキ (ボグダノフ、ポクロフスキー、ルナチャルスキー、ブプノフ、その他) のこと。召還主義は、一九〇七年におけるポリシエヴィキ内部の日和見主義的潮流——ボグダノフとカメネフにひきいられる——であるポイコット主義の直接の延長であった。召還派たちは、一九〇八年に独自のグループを結成し、レーニンに反対する活動をおこなった。彼らは、国会や労働組合や協同組合その他の合法および半合法組織に参加することを断固として拒否し、非合法組織の枠内にとじこもうとつとめた。彼らは、革命的な言辞にかくれて解党派の方針を遂行した。彼らは、党から合法的活動形態を利用する可能性をうばい、党を非黨員大衆から切りはなし、反動の打撃にさらそうとこころみた。レーニンは召還主義者を「新しい型の解党主義者」あるいは、「裏がえしのメンシエヴィキ」と呼んだ」(前出、四六六—四六七ページ)。

「最後通牒派——召還派の一変種で、彼らは、国会議員団にまえもって最後通牒を呈示し、それが遂行されない場合には社会民主党議員を国会から召還することを提案した。最後通牒派は、実際には隠蔽された偽装した召還派であり、レーニンは、彼らを「恥づかしがり屋の召還派」と呼んだ」(前出、四六七ページ)。

そこで、つぎにトロツキーの論文——『ロ、シ、ア、社、会、民、主、義、派、の、發、展、諸、傾、向』（一九二〇年）——をかかげることにしよう。これは、わたしが原文について訳出したものであるが、不適當な訳文もすくなくないと考えるので、この点は読者諸君の寛恕をえたいとおもう。また、あえて全文を載せることにしたのは、著者の考え方を正確にとらえるにはこのほうがより適切であると考へたためである（①、②、③は、のちの説明の便宜のため、山本のつけたもの）。

## I

①科学的社會主義は、その創始者たちが明らかにしたように、先進的なヨーロッパ諸国の物質的および精神的發展から導きだされた。だが、労働者運動の指導者たちの前では、それは、実践に移すことだけが肝要とされた既成の教義としてあらわれた。マルクス主義が理論的にすでに克服してしまつた社會主義の諸構造の中の内部的諸矛盾はいずれも、マルクス主義の實踐的適用にさいして、民族的に政治的諸矛盾の形でふたたびもどつてきた。最善の社會的教義、すなわち世界的經驗がこのうえもなく適切に上演した社會的教義さえも、經驗そのものにとつてかわることはできない。あらゆる国は、それ自身でマルクス主義を占有するためには、それを自力であらたに手に入れなければならなかつたし、また手に入れなければならぬ。社會主義運動の國際的な性格は、あらゆる国が先進諸国の經驗からそれ自身で自身にとつての教訓をひきだすということのうちに示されるばかりでなく、また、あらゆる国がその誤謬をくりかえすということのうちに示されている。

②國際的社會民主主義派の内部的闘争は、大体において、資本主義諸國家の政治的諸形態および法的諸規範への社會

革命的諸階級の適応過程の諸矛盾の反映である。この全發展がその間を動揺している両極端は、一方では、あらゆる國家的法的上部構造の無政府的な「否定」であつて、この上部構造たるや、經濟的基礎により一個の形而上的化石に変えられていて、この化石にたいして無政府的社会主義者やサンディカリストたちは、純粹な革命的意志のダイナミイトを對比させるのである。そしてそれは、他方では、改良主義的無能力インポテンツであつて、それにとっては、プロレタリア的階級闘争のいっさいの制限は、なにか絶対的なもののおもわれる、——それも、プロレタリアートの階級敵の悪しき意志があらゆる制限をば用意周到にも「法律」に変えてしまつてゐるという、たったひとつの根拠からそうおもつてゐるのである。無政府主義および改良主義の方向へのこれらの逸脱が、それらが労働者運動の内部的欲求を一面的にみたすことによつて階級闘争のそれぞれの新しい段階において必然的に生ずかるぎり、社会民主主義政党は、自己保存にたいする顧慮から、それらの逸脱と理論的に闘争し、それらの逸脱を実践的に屈服させ、最後に、それらによつて党の行動能力が脅かされる場合には、その信奉者を党から排除することをよぎなくされる。

③これらの錯誤にたいする一般的な公式というものはないが、その理由は、これらのものが公式の生活への適応から生じてゐることにある。

④インタナショナルによつて外見上完全にうちやぶられた無政府主義は、サンディカリズムの全盛の中にその復活をふたたび祝つた。フランスにおける社会主義的な入閣主義の完全な破産と同時に、それは、フランス語をつかうある他の国において、ベルギーにおいて、入閣主義的傾向が勢力を得ることを妨げることはできなかった。

⑤理論は經驗にとつて代ることはできない。すべての西欧諸国では、大衆をその渦巻の中にひきこみ、政党への結集を生みだし、幻想をつくりだしてはそれをうちくださ、かくして政治的經驗を集積したところの、ブルジョア革命の



のちに、はじめてマルクス主義があらわれた。一八四八年のドイツ革命は、その実際の成果はひじょうにまずしなかったが、それと同時に、六〇年代のプロシアの憲法闘争をもって、ラッサールの勢力とドイツ社会民主党の形成のための政治的な諸条件を形づくったのである。ラッサールもリーブクネヒトも、同じように一八四八年の学校から生れたのである。

⑥しかし、ロシアにおいては、マルクス主義の使命は、多くの関係で、ずっと困難であり、ずっと錯綜していた。ここではマルクス主義は、国民的革命の崩壊ののちにはなくて、来るべき革命にたいする幼稚な観念的直観（「ナロードニキ主義」、「ナロードナヤ・ヴォーリヤ」の諸傾向）の難破ののちにあらわれた。それは、プロレタリアートの直接的な政治的自己決定の武器ではなくして、意識的な大衆闘争のあらゆる伝統が欠如している政治的に未発達の環境の中での、社会主義的インテリゲンツィアの準備的な社会的教導のための武器であった。

⑦ロシアにおける革命的インテリゲンツィアが完全に社会主義的イデオロギーによって支配されていたことは、西欧における民主主義的イデオロギーの全面的崩壊の時期におけるロシア・プロレタリアートの偉大な革命的役割の結果であった。歴史的に処女のようなプロレタリアートに対して、社会主義的インテリゲンツィアは、より大きな政治的理解力と、革命前ブルジョア社会との物質的結合という、長所をもっていた。この長所は、かれらにたいして、社会民主主義的諸組織の中での指導的地位をあたえた。だが、彼らは、労働者党に加入するさいに、彼らの社会的特性全部を、つまり、セクト的精神、インテリの個人主義、イデオロギイ的物神崇拜を党のなかにもちこんだ。彼らのこれらの特質に、彼らはマルクス主義を適合させ、こうしてマルクス主義を歪曲した。このようにロシアのインテリゲンツィアにとっては、マルクス主義は、すべての一面性をばそのもつとも外面的な極端にまでかりたてたための手段

となつたのである。われわれの内部的な党内闘争の歴史的意味を理解しようと欲する者は、革命前と革命の間におけるわれわれの党の内部の指導的諸組織の社会的構成を考慮の外においてはならない。

⑧国際的な社会民主主義派の内部には、すでに述べたように、ひとつの社会革命的階級の議会主義や労働組合闘争、その他の限られた諸条件への適応によって、分裂と確執とが惹きおこされた。現在までロシア社会民主党内部の分裂が生みだしたはずれの分派フラクションも、まず第一に、プロレタリアートの階級運動へのマルクス主義的インテリゲンツィアの適応によって生じたものである。社会主義的終局目標の見地からみて、この適応過程の真実の政治的内容はきわめて限られていたが、その形態もまたきわめて奔放なものであり、それが投ずるイデオロギー的陰影もまたきわめて強力なものであった。

## II

①労働運動の発展がもたらした新たな欲求のひとつひとつは、いづれも、ロシアにおいて、この欲求の充足のための道具として役立つところのひとつの特別な分派フラクションを生み出したが、この分派はまた同時に、マルクス主義的に思考するインテリゲンツィアが労働運動に適応する表示形態として役立つものである。そして、この分派はまたそれとして、その独自の全労働運動の哲学を創り出したのである。「経済主義」は、産業躍進の時期に生れたひとつの経済的闘争の地盤の上に成立したものであり、そのさい自身にとって生じた課題をば、政治は完全にかまたはできるかぎり大幅に運動から排除されるべきだというように把握したのである。のちになって、経済的危機がおこり、国内で政治生活が活発になったときには、「政治家」はまたそれとして、経済主義者（労働組合主義者）を一人のこらさず駆逐するために、それを利用した。だが、その後すぐに、かれらは二つの路線に、すなわちメンシェヴィキとボリシエ

ヴィキの路線に分裂した。この分裂の基礎は、組織問題における、すなわち本来大衆運動にたいする党組織の關係の問題における、把握の相違であつた。

②これら二つの路線は、たがいにきわめて尖鋭にたたかひあつたが、しかし事実上の差異はもととまつたく些細なものであつた。そこへ革命が突発し、革命の大問題がまきおこつた。革命は、ポリシェヴィズムもメンシェヴィズムもひとしく両者にたいして、必死の闘争においてそれぞれがあつた焦眉の運動の諸欲求に奉仕することを強制することによつて、この出来あがつて現存する二つの組織形態を利用しつくした。政治的歴史は、これよりして月をもつてはかられることになつた。ポリシェヴィズムとメンシェヴィズムは、きわめて短期間に、それぞれ自力で、二つのがつた革命の把握と二つの戦術をつくりあげた。

③政治的に未熟なプロレタリアートにたいする影響力を獲得するための、マルクス主義的に思考するインテリゲンツィアと他の思考方法のインテリゲンツィアとのあいだを暴れていた闘争は、それぞれがあつたグループ相互のあいだの闘争とならんで、インテリゲンツィアのヘゲモニーからプロレタリアートの社会主義的前衛を解放するための闘争の萌芽を、——この解放のための諸条件が創りだされたかぎりにおいて——それ自身のなかにもつていた。

④ポリシェヴィキは、本来的に原始的な党組織を原理にまで高め、プロレタリアートの革命的気分と結びついたプロレタリアートの政治的未成熟のうちに、なぜ労働者階級がマルクス主義的インテリゲンツィアによつてもつとも合目的に指導されるかの理由を見出した。

⑤メンシェヴィキは、これにたいして、党の三階建て構成をきわめて鋭く批判し、マルクス主義の外観のうしろに隠されたインテリゲンツィアのブルジョア的ジャコバン党的性質を暴露し、プロレタリアートの独裁の旗のうしろにプロ

レタリアートにたいする独裁がかくさされていることを明らかにした。メンシェヴィキの極端な翼は、古い党に代って大衆の中に解消するという要求をうちたてることによって、最後には英雄的な自己否定の思想にまで行きついた。しかしながら歴史の皮肉は、つぎのことを欲した。それは、すなわち、メンシェヴィキがポリシェヴィズムにたいする対重としてさえ——だが、ポリシェヴィキのやり方にまったくしたがって——この自己否定思想をたえずますますはつきりと強調していった間に、ひとつのかたく閉鎖的な分派を形成した、ということである。この閉鎖的な分派とは、すなわち、一般に知識階級の人々によるプロレタリアートの指導にたいする反対という合言葉のもとに、実際には労働者大衆にたいする彼ら独自の指導のための闘争をおこなった——共同して孤独に熱中するために組合的結社を組織したかの有名な個人主義者たちと同様に——同志の一組織である。ロシア社会民主主義派におけるインテリゲンツィアの指導的役割がなんらの偶然の現象でないばかりか、社会主義的プロレタリアートの独立化のひとつの前提条件ととして一個の歴史的必然性でもあったし、またポリシェヴィキもメンシェヴィキも同じく、大衆に革命的スローガンをおたえ、彼らの基本的欲求に応じたひとつの強固な革命的組織をつくったのであるから、これら大衆は、つねに時間的および場所的条件にしたがって、ある時はポリシェヴィキのまわりに、あるときはメンシェヴィキのまわりに結集したのである。大衆は、二つの路線からかれらの階級闘争に役立つものを取りだしたが、それによってすこしの間、二つの路線がプロレタリアートの奥深いところに堅固な根を張ったかのような幻想が生れたのである。

### III

①一九〇八年から一九〇九年の間に止めどもなく進行したところの党の分解は、第一には、反革命の時期の諸関係と気分を、第二には、党組織の古い形態と労働者階級の変化した諸欲求との間の一般的な不調和を、その原因としてい

た。

②偉大な希望の瓦解によって力を奪われ、反革命の残忍な打撃によって打ちのめされ、十年におよぶ経済恐慌の困窮により疲労困憊させられて、労働者は集団をなして党を見棄てた。それは、先行する年々の法外な力の緊張のあとのひとつの自然の反動であった。その基本的な必然性において、この過程は、ほとんどイデオロギー的反射なしに生じたのである。労働者階級のうちのもっともおくれた、あまり広範でない部分は、一時的に黒百人組の列の中に避難した。他の、同様に重要でない部分は、神秘的な宗派に入った。離ればなれの熱血漢たちは、大衆から離れて、ひとりでかまたはグループで、警察にたいするゲリラ戦争に、そして意味のない収奪的企てに、彼らの生命を失った。他の部分は、彼らの階級から逃れ出ることをさがし求め、脱退して勉強し、代数にとりかかり、高等学校卒業試験のための準備をした。だが、労働者の広範な大衆は、完全な無感覚におちいり、賭博に、飲酒に、そしてあらゆる種類の放蕩に身をゆだねた。わずかに、より多く自覚した志操堅固な労働者たちが、労働組合、教育団体、その他に、団結することを求めたのである。

③民主主義的な諸出版物の中では、当時、社会民主主義派にたいする野蛮な追求がおこなわれた。革命前の時期に「教養ある社会」にたいして「民衆」への道を拓いてやった党は、いまでは教養階級と民衆との間に不和をもたらしたとの罪を帰せられた。ただたんに革命の客観的諸傾向を政治的スローガンの言葉に翻訳しただけの党は、——諸対立が激化したために——本質上当然に、いかなる機転も、またいかなる責任感も持ちあわしていないとの罪が帰せられた。まさしく社会民主主義派が革命の先頭に立って進軍していたが故に、革命の敗北の年代記は、社会民主主義派にたいする公訴状となった。革命によってよびおこされた階級対立の尖鋭化は、結局においては社会民主主義派にと

って利益となるものではあるが、さしあたりは社会民主主義派に多くの重大な打撃をあたえたのである。はじめ昨日は同情者や協力者のしつかりした集団として党をとりまいていた半社会主義的インテリゲンツィアはみな、すばやく方向転換をして、彼らの母なるブルジョアジーの營養豊かな胸のうちに帰った。この戦線変換のイデオロギー的諸形態は、教育的なものというよりむしろ慰めとなるものであった。それは、すなわち、サンディカリズム、神秘主義、性的無政府主義、聖ヨハネ福音書、ワンダ・ザヘル・マゾフの『回想録』であり、すべて社会主義の誘惑に対して動員されたものである。

④党の最良の分子たち、一九〇五年の指導者たちは、このころ監獄に、流刑に、外国に散らばっていた。非法法の諸組織にとどまりつづけたインテリゲンツィアは完全に心の平静を失った。政治的な見込みは、ますます思わしくなくなった。下では大衆が去っていき、上では以前にブルジョア民主主義派の系列から党に流れこんでいた財源が涸渇した。党の諸組織は、袋小路に入りこんでしまった。その成員たちは、かれら自身生存のための闘争という共通の問題の前に立たされているのを見出した。ついこの間まで抽象的な党範疇の擬人化以外のなにもでもなかった職業的革命家、アジテーター、オルグ、非法法文獻の運搬者や禁欲者、謀叛的隠者、欲求——虚偽の身分証明書にたいする欲求を除いて——のない人々は、反革命的鬱屈気のなかで、きわめて急激にみずからを具体化して、まったく世俗的なった。彼らのそばには、突然、もっとも合法的な諸欲求、すなわち、家族、妻、子供、おむつ、子供用ミルクが浮びあがってきた。彼らは、熱病的な性急さで、彼らの非合法的過去を清算し、大学にもどり、弁護士の服をつけ、企業家組合の手代、書記になり、ブルジョアの出版物の編集機を占めた。

⑤古い黨員インテリゲンツィアの一部分は、彼らの活動を——最小抵抗線にしたがって——、党組織に対立してなお

自由主義的な市民階級の好意をうけていた合法的な労働者団体に移した。警察や、または労働者階級の自由主義的な友人たちと衝突におちいるということなしに、労働者クラブの中で活動しているという可能性があることが明らかとなった。しかし、この活動の可能性を確保するためには、労働者団体が党と関係をもつことによって迷惑をこうむることのないように、団体を守ることが必要となった。そこで、すばやくひとつの新しい政治的形態が、社会民主主義派にたいして公然と闘争するところの、秘密の社会民主主義者の政治的形態が形成された。

⑥混乱と没落とのこの零囲気のなかで、知識分子による党の指導にたいして向けられていたメンシェヴィキの批判は、知識分子自身のもとで熱狂的な反響を見出した。歴史的に形成されて出来あがったような党は、いまや、よりいっそうの発展にとって一つの不幸だと宣言された。インテリゲンツィアの党からの逃亡は、いままではもはや裏切り行為ではなく、一つの政治的義務と見なされることを欲するようになった。

⑦このようにして、われわれの政党用語で「解党主義」(政党组织を「清算」しようという衝動)と呼ばれているものは、最高に錯雑した現象であることがわかるのである。それは、まず第一に、「党を倒せ」という、彼らの実践的帰結をともなった政治的逃亡のイデオロギーをふくんでいる。それは、さらに、一つの合法的な活動分野にたいする渴望をふくんでいたが、この渴望は、綱領と戦術の革命的精神をばそのためによるこんで犠牲にするというほどの極端に走るものである。それは、最後に——そして、これがすべての他のものの根柢となっているのであるが、——大敗北の直接の結果としての、大衆の政治的消極性をふくんでいる。

⑧発展の均整を保って、このメンシェヴィズムの崩壊と平行して、ポリシェヴィキ分派フラクションの崩壊も進行した。大衆運動の没落の時期に労働者階級のより活動的な分子たちにたいする影響力を失わないことに汲々として、ポリシェヴィズ

ムの一部は、マルクス学説の名において略奪戦争、收奪、等々の戦術を採用したが、その戦術の中には、やはり革命的心理の無政府的な解消が現われていたのである。これを基礎として、その上に、革命に先き立つ時期において党に、とくにポリシェヴィキの分派に特有の、あの陰謀者の行進が、その完全な展開に達した。党の背後では、大衆の政治生活とはなんら共通するところがなく、そして、その本質上党の監督の下におくことのできない事柄が出来あがっていた。党の諸組織の中には、冒険的な諸要素が侵入する。責任ある党のポストは、党運動の外部にある一領域においてその組織的才能をあらわしたような人物に委ねられることが、稀ではなかった。どの労働者組織からも独立していること、「幸運」にたいして英雄的な投機をすること、「第二級」の党同志たちからは秘密にされていたいろいろの企て——これらすべてのものが、無規律な個人主義、党規約および党モラルの「慣習踏襲」にたいする軽蔑を、要するに、——一つの政治的な心理を、労働者民主主義の零囲気とは本来完全に無縁であり、これに敵対的である政治的心理を、発展させた。メンシェヴィキ的批判主義のハムレットが、政治的發展の諸矛盾に圧迫されて、党の存在問題にたいして、かれらの解党主義的な「なくなれ！」をもって答えていた間に、権威ある中央集権的なポリシェヴィクは、自己保存本能の圧力のもとに、党を大衆から、分派を党から、分派の中央部をその周囲から、それぞれ解きはなすことをけんめいに努力し、そしてかれポリシェヴィクは、宿命的な必然性をもって、その政治的実践全体をば「唯一者とその所有」というシュティルナーの定式の中に押しこむことに成功したのである。

⑨大衆の激昂の波がますます深く沈めば沈むほど、ポリシェヴィキの隊列のなかにおける解体がインテリゲンツィアの制しがたい退却によってますます進展すればするほど、ポリシェヴィイズムの内部の若干の分子の、彼らの分派の外部に横わっているすべてのものにたいする不信頼は、ますます尖鋭なものとなり、労働者諸組織をば命令、訓戒、



「党の名における」最後通牒的要求を通じて、その従属下にとどめておこうとする傾向は、ますます明瞭に現われてくる。

⑩これらの分子、いわゆる最後通牒派たちは、国会<sup>ドワイ</sup>フラクションまたは合法的な労働者諸組織を党の影響下におくたためにたったひとつの方法、つまり、彼らに背を向けるという威嚇しか、知らない。ポリシエヴィズムの歴史全体を通じて現われているボイコットの傾向——労働組合の、国会<sup>ドワイ</sup>の、地方自治の、等々のボイコット——それは、大衆への「同化」たいするセクト的畏怖の産物であり、「和解できない禁欲」の急進主義であるが、——その傾向は、第三国会<sup>ドワイ</sup>の時期までには、ポリシエヴィズムの内部での一つの特別な潮流をなすまでに濃密化し、この潮流はまたそれで、いっさいの議会的活動の完全な、無政府主義的に着色された拒否から、この活動にたいするある種の軽蔑的な投げやりの寛容にいたるまで、種々様々のニュアンスを示しているのである。

⑪シュトルム・ウント・ドラングの時代のあとで人がそれに屈服しなければならなかったストルイピンの法規制の束縛にたいする革命的感觉の直接的な抗議、六月十六日の体制にたいする革命的闘争を六月十六日の議会内での活動と結合することを不可能だとする政治的な形式主義、合法的な闘争可能性を和解しがたく拒否することの結果として革命的気分が再び復活するにちがいないという迷信的な確信、そして最後に——その他のすべてのものの根拠として——社会民主主義派国会<sup>ドワイ</sup>代議員の孤立と無力化に導くとともにいっさいの公然の労働者組織の中の気分の押し下げに導いたところの、労働者の無感覚、——これらが、われわれの党内用語で最後通牒主義およびオトゾヴィズム（召還主義<sup>（注）</sup>）という名称をもっているあの類似の潮流の要素であり、成分である。

（注） 召還主義は、国会<sup>ドワイ</sup>フラクションを召還するか、あるいは、国会<sup>ドワイ</sup>フラクションに議席放棄をさせるという要求を主張するも

のである。

⑫しかし、ポリシエヴィズムは、最後通牒主義によって支配されるままにはなっていない。その反対に、ポリシエヴィズムは、それに反対して、断固として、あるいはより正しくは、激烈に、行動した。時を同じくして、メンシエヴィズムは解党主義との闘争に入った。閉鎖的な党の革命的役割を低く評価すること、戦術的な散漫、階級のあらゆる気分の移り変りによって階級にたいして無気力に屈服すること、——これらすべての特徴をば、解党主義は受け入れたのであって、これによって、メンシエヴィズムのすべての革命的分子たちにひとつの自由な道をひらいたのである。これらの過程のひとつの結果は、双方の旧分派の接近であった。もちろん、彼らは、最初はきわめて疑い深く、その手に武器をもって、たがいに接近したのである。

#### IV

①国会活動ドクトの問題におけるポリシエヴィキのもとでの分裂と、党を維持する問題におけるメンシエヴィキのもとでの分裂とは、双方の側にとって、ひとつの合同を可能にするために、心理的に必要なものであった。——そして、党のよりいっそうの分派的分裂フラクシオンをば分派闘争の力学が完全に不合理なものだと論証したのであるから、それだけでもすでにそれは必要であった。しかしながら、古い分派の内部での新しい分派の形成過程は、そのもの自体としては、たんに党がその崩壊の道をよりいっそう前進することを示すものであった。二つの完全に異なった種類の現象が、ひとつの独創的な意義をもった。それは、労働運動の諸形態と諸方法とが錯綜することと、進歩的な労働者の隊列からひとつの新しい党のタイプが現われることとであった。そのどちらもが、革命の直接の一遺産である。

②革命以前には、われわれは眼の前に、秘密の党サークルの組織的独裁のもとに、経済的および政治的闘争の無定形

な、挿話的な突発を見ている。革命以後には、われわれは、大衆自身の中に、たとえ緩慢ではあるが持続的な結晶化を見ている。種々様々の無党の労働者組織が生まれて、独立的な存在をつづけた。労働者たちは、労働組合、団体、地方自治の領域において、計画的な闘争の道をすすみ、教育団体のひとつの完全な網を蘇生させた。党は、これらの諸組織を外部から指導することはできなかった。というのは、党は、それらのこまかい仕事にたいして、党の一般的な綱領的な諸要求を持ちだしたからである。党は、先ず、日常の実践のあらゆる曲折を通じて諸要求をつらぬきとおすことを学ばなければならない。党は、新しい活動諸条件のもとで、理論的に同意見の人々の閉鎖的な団体として、労働運動のすべての形態の上に立つところの指揮団体として、とどまるということとはできない。党は、自身、階級の核を形成しなければならず、それ自身、その指導機関をもってあらゆるプロレタリア的団体の奥深く浸透していつてそれらを内部から指導するところの、大衆組織に変らなければならない。この仕事のためには、メンシェヴィキの分派もポリシェヴィキの分派も、——彼らのこれまでの思想的および組織的構造によって——完全に不適合であることが証明された。マルクス主義の根本的諸問題において一致している同意見の人々のたんなる結合団体として、双方の分派は、議会、自治体および労働組合の実際の仕事の領域において、一定の見解も経験も持たず、またそれに応ずる機関も持っていなかった。もちろん、すべてこれらの活動部門は、たえずどこでも、個人のかまたはグループに結合した社会民主主義者の指導を受けてはいたが、しかし、これらすべては、分派の枠の外で、分派の組織的影響の外で、おこなわれたのである。

③最初に活動を合法性の中に注ぎこんだのは、メンシェヴィキであった(二つの国会全体ドヴォーの社会民主主義的フラクション、労働組合機関紙の編集、労働者クラブ等々の幹部は、すべてメンシェヴィキから成り立っていた)。しかし、

そのさい、メンシエヴィキの分派そのものが、組合、クラブ等々で活動する個々のグループに分離することによって、ちりちりばらばらになっていた。無党派の労働者諸組織は、孤立したままであった。それらは、党の隊列の中に指導者を見いだしたが、しかし、党による指導はなにとつ見いださなかった、その中でメンシエヴィキが優勢を占めているところの、もっとも影響力の強い合法的組織、社会民主主義的国会<sup>ドワー</sup>フラクションでさえ、メンシエヴィキの分派の監督の完全に外部にあって活動し、たいいてい分派の外にいたるところの、個々の老練な社会民主主義者によって、たえず支持をうけていた。その間に、個々の党組織が、それ自身、その完全な広がりにおいての階級的任務（團結の自由のための闘争、国会内における社会立法の諸問題、種々の会議の席上での労働者代表とブルジョアの政論家との衝突、等々）に取り組んでいるのがみとめられたところでは、どこでも、ひとつの並列的な党指導の欠乏というものがまったく耐えがたいものであることが証明された。メンシエヴィキそのものの隊列の中に、党にたいする欲求が生じてきた。

④メンシエヴィキのばらばらのグループがその合法的姿勢にすっかり固まっていた間に、ポリシエヴィキは、反動の打撃にたいして、非合法的な党の機構を精力的に防禦したのであって、彼らは、外国での出版活動を建て直し、ひとつの全露党会議を召集した。最初は、双方の分派は、二つともたがいには、接触するようになる活動領域を見いださなかったし、かくして、その分裂は無期限に続くものとなるように思われたかもしれない。だが実際には、まさにこのような仕方において直接に、それらは、党統一の問題に歩み寄ったのである。

⑤非合法的な諸組織の中では、ポリシエヴィキは、ますます自分を孤立していると感じた。分派のもっとも独立的なプロレタリア的分子は、組合、クラブ、等々の中で、メンシエヴィキに従っていた。党の枠を一拳にひろく拡大した

革命的時期は、ひとつの多岐な廻し者の組織という形で、ひとつの恐ろしい遺産をあとにのこした。このスパイ網の作用は、大衆の気分がますます圧迫されればされるほど、党組織への新しい分子の流入がますます困難になればなるほど、それだけますます破壊的なものとなった。どうにか重要なアジテーションは、ほとんどおこなわれなかった。非合法の秘密諸組織の周りには、完全な空虚がおそつてきていた。このような諸条件のもとで、ポリシェヴィキ分派のすべての活動的分子にとってはっきりと明白にあらわれてきたのは、地下の活動分野を公然たる労働者諸組織に結びつけて後者を統一し、秘密諸組織に新鮮な血液を注入することの必要性であった。旧い党組織の枠の中で考えると、この課題は、なによりもまず——党活動の共通の改善と、党機構の再組織とのための——ポリシェヴィキの、メンシエヴィキとのひとつの戦術的、了解を意味したのである。

⑥この新しい機構のために、先行の発展は、ひとつの新しい人間をすでに創りだしていた。

⑦革命以前には、党内のマルクス主義的インテリゲンツィアは、先進的な労働者たちを完全に後景におしやっていた。先進的な労働者たちは、そこで理論的な定式や政治的なスローガンが仕上げられるところの、比較的小さな実験室の外におかれたばかりでなく、また一般に、なんらかひとつの組織の外におかれた。スローガンや定式を、彼らは、自分たちの上に立っている党から、出来あがった形で受けとったのである。

⑧革命的行動の諸要求は、数十万の労働者を包含する強力な組織を創りだした。それは、ロシアにおける労働者民主主義派の最初の真摯な学校であった。しかしながら、これらの革命的諸組織は、党組織の一部分ではなかった。——それは、たんに形式的にそうであったばかりでなく、さらに、この時期における政治的スローガンが党によって、党の参謀本部の手で作成されるのにたいして、労働者代表ソヴェトは、これらのスローガンを広め、実行に移す装置と

してしか意味をもたなかったという意味においてさえ、そうであったのである。労働者大衆にとって、党は、現在でも、なにか自明なもの、もとから、そして永久にあたえられたもの、だが、かれらの社会の外部に立っているものと見なされた。このような党にたいする考え方をもって、労働者たちは、一九〇六—〇七年に公然たる諸組織に加入したのである。彼らは、社会民主主義者であるという意識をもっており、党感情は彼らの骨の中にまでしみこんでおり、——そして、社会民主主義的労働者は、自然に労働組合やクラブのもっとも影響力をもった成員になっていたの、彼らには、そのことがプロレタリア運動の社会主義的進行にとって十分な保証と思われたのである。彼らは、社会民主党なしの社会民主主義者であった。その後になつてはじめて、一九〇九年に、党が労働者たちにたいして指導的な影響力を行使することをほとんどやめたときに、そして、彼らにとっては彼ら自身の孤立した力が頼りであることを見出したときに、彼らは、突然に——だが、また完全に、そして決定的に——党による結合が必要だという認識に到達した。そこで、ひとつの新しい社会民主主義的タイプが出来あがった。それは、もはや大衆の上に活動している職業的革命家のタイプではない。それは、いまや、つねに大衆とともに生活している職業的な錠前工か、または織工である。これらの錠前工や織工は、すでに革命以前にしばしば党とその諸分派の影響下におかれていたが、しかし、彼らがそれらから採り入れたのは、プロレタリア的運動の諸要求に一致したことだけであった。彼は、革命的政治的學校を修了し、公然たる諸組織の中で階級自治の不可欠の諸方法を身につけ、そして、闘争の進行そのものを通じて合法的活動と非合法的活動との結合が、国会演壇と革命的パンフレットとの利用が、必要であるとの認識に到達した。そして、諸分派への分裂は、党の再建にとって妨害となるので、彼は諸分派について良くは思わない。彼は、唯一つの、活動能力ある党を必要としているのである。

⑨一年半前に創立された労働者新聞『プラウダ』は、二つの分派の外部に立っていて、きわだった全党的傾向を表現するように努力したものであるが、まさに右のような新しい党要素を眼中においていたのである。闘争のきわだった諸要求を定式化すること、先進的な労働者がどのような位置にいようとみな同じように、彼らに政治的な感覚を伝達すること、そして、それによって党の分派的崩壊を克服することを要求すること、——こうした課題をば、『プラウダ』紙は、その創刊以来、設定したのである。

V

①分派の闘争方法——不機嫌な、そして人を不愉快にする論争、対立する実践的スローガンをもって大衆にアピールすること、相互のボイコット——は、すべて、その本質からいって、党内の敵対者の絶滅を狙ったものである。各分派は、他の分派の中に、人格化された異端を見だし、そして、もっぱらそれ自身のみから成り立っている将来の党を心に描いたのである。もしポリシェヴィキがメンシェヴィキに、または、メンシェヴィキがポリシェヴィキに、勝った——むかし「政治家」たちが「経済主義者」たちに勝ったように——ならば、その結果は、これらの闘争方法の歴史的な正当化となつたであろう。なぜならば、勝利に導くその方法こそが正しいのであつて、勝利者を人は裁くことはできないからである。だがその結果というものは、それとはまったくちがったものであつた。敵対者の直接の絶滅を狙つた七年の闘争のうちに、双方の分派は、ひとつの協定を結ばざるをえない羽目にあることをさとした。このことは、彼らのうちどれひとつとしてプロレタリア運動のすべての側面を體現していなかつたということ、そして、ただそれらの結果によつて——両極端の克服によつて——のみ、社会民主主義党は発展することができるということ、意味した。この帰結は、協定の事実、そのものから明らかになつているのである。

②協定の内容は、つぎのようなものである。すなわち、指導的団体としての中央委員会はそっくりそのままロシアに移される。そして在外者は、たんに思想的に影響をおよぼす可能性を有するだけである。党への分派の組織的および財政的解消は、精力的に要求される。中央機関は、党内の種々様々の潮流がより大きな自由を獲得し、それによって分派の諸機関が余計なものになるというようなやり方で、再組織される。『ブラウダ』と中央委員会との間には、ひとつの緊密な連絡が樹立される。最後に、党大会を召集してその席上で合法的な労働者諸組織が広範に支持されなければならぬ、という決議がおこなわれた。

③合同の基礎的な記録文書は、中央委員会によって満場一致採択された、党活動の諸任務にかんする戦術上の決議である。この決議は、社会民主党の戦術が、革命的噴出の時期においても、平和な「有機的な」発展の時期においてと同様に、その原則的な基礎においては同じであるという、絶対的に根本的な原則を宣言することによって、双方の分派の戦術的哲学を徹底的に一掃し、党を発展の広々とした道にみちびくものである。

④第三国会が<sup>ドクト</sup>悪しき議会的な装飾であつて、そのうしろに古い、野蛮なツァーリズムが隠されているということは、まったく疑いをいれない。だが、この悪しき飾りは、なんら単純な政治的な策略でもなければ、なんらの偶然の出来事でもない、——それは、資本主義的發展の諸条件へのツァーリズムの適応過程を特徴づけるものである。この適応過程がどこまで進展するか、またはいいかえれば、この道程において蓄積された革命的諸矛盾がいつ、その突破点に達するか——この問題にたいしては、党それ自身は、予言を下すことを拒否する。だが、党は、第三国会<sup>ドクト</sup>およびそれと関係のある合法的連合のいっさいの諸形態——結社法、合法的出版物、等々——をプロレタリアートの強固化のために利用しつくすことを、義務的なものとみなしている。他方において、ロシア社会民主党は、党としては、中立



的な労働者諸団体および国会ドクワイの中にあるそのすべての機関の活動を結合しているところの、政治的な全体としては、非合法にとどまることをよぎなくされている。合法的活動方法と非合法的活動方法との計画的な組合せは、ドイツの同志たちのもとでは社会主義者法の時代の彼ら自身の戦術についての記憶をよびおこすにちがいないが、それは、われわれの決議によつて前景におかれてゐる。組織された党の放棄というものは、国会演壇ドクワイおよびその他の合法的な活動の可能性にたいする自称革命的な軽蔑とまったく同様に、合法的なストルイピンのロシアの環境の中では党はどんな空間も見いださないといいことを理由として生まれたものであるが、これら両極端は、採択された決議によつて、同じようにしてかたわらにおしやられている。社会民主党の戦術は、バリケードにも、消費組合のカウンターにも、結びつけられているものではない。党は、労働者たちの階級意識を澄明なものにするために、彼らをひとつの独立した組織に結びつけるために、活動のあらゆる形態と方法とを利用するのである。それが唯一の現実的な革命的活動であり、そして、このような活動がひとり、党をば、これを最後として社会主義的なセクト主義のあらゆる形態から浄化することができるものである。

⑤しかし、もっとも近い将来、事態はどのようになるであろうか？ 中央委員会における分派の代表者によつて結ばれた協定そのものは、確固不動のものであろうか？ それにたいする答えは、イエスであり、またノーである。その協定が、影響力をもつ党サークルの代表者の間で結ばれた個人的契約に帰着するものであるかぎりでは——そして、高い程度にそれはそれ以上ではないのであるが、——それは、個々人の善意や政治的見解のような、不確実な諸要因にかかっている。心理学は、一般に、歴史的発展の保守的な要因であり、そして一サークル、一セクトの心理学は、他のどのサークル、どのセクトよりも、ずっと保守的なものである。

⑥分派的過去フラクショナルそのものが、いまや、ロシアにおけるひとつの広範な労働者運動の失敗によって、さらに一度ならず人目を惹くようになるであろうこと、そして、党統一の要求をば、古い崩壊している諸分派の強化にか、または、新しい分派の創出にか、利用しつくすという試みが、きわめて多分に可能であるということは、いささかの疑いもいれない。しかしながら、分派闘争の再発と再勃発という事態にぶつかっても、絶望して落胆するといういかなる根拠をももっていないのである。すべてのグループにたいして党統一という言葉を声高く言いあらわすことを強要したところの諸傾向は、プロレタリアの前衛の政治的独立が増大するのと同じような、打ちかちがたい力をもって強固なものになっている。意識を獲得した労働者層の意志に反しては、いかなる分派も、もはや大衆を自分のうしろに従えていることはできないであろう。（傍点および注は、トロツキーのもの）

三

読者諸君、ここにかけたトロツキーの論文の中味を、どうか、しかとお読みいただきたい。いったい、これは、どういう論文であろうか？ これは、マルクス主義理論をけんめいに刻苦して身につけ、これを実践の中で正しく適用し発展させることにあらんかぎりの努力を傾けている、真のマルクス主義者にしてはじめて著わすことができたような論文であろうか？

この拙論のはじめにもふれたように、トロツキーは、一九二九年に彼の著わしたその自伝『わが生涯』のなかで、終始一貫、かならず自分自身をばレーニンにもっとも近い、真正のマルクス主義者として描きだしているのであるが、はやくもすでに一八九八年に独力でマルクスのそれと同じ「方法論」、とくに「弁証法」を自分のものにして

しまったと書き記しており、また、「流刑の時代にはマルクス主義は私にとって、私の世界の概念および思考の方法の、決定的な基礎になっていた」と明記している。<sup>(3)</sup> また、一九〇二年秋ロンドンではじめてレーニンに会ったとき、彼は、レーニンの「どういう理論的見地に立っていたのか」という問いにこたえて、「『ロシアにおける資本主義の発達』を共同研究していたこと、『資本論』に没頭していた」<sup>(4)</sup>ことを答えた、と述べている。そしてさらに、トロツキーは、自分がいかにマルクス主義理論を熱心に勉強してそれを身につけることにはげんできたものであるか、いかにそれを「美事に」体得しているかということ、疑問の余地のないように読者にのみこませてしまうために、彼自身これまでずっと『マルクス・エンゲルスの往復書簡』をつねに座右にそなえて、たえずこれから「心理的啓示」を受け、ついにはマルクス・エンゲルスの二人が「完全に述べていないことまで見ぬいた」ほどの域に達していたのだということ、を、ながながと説明しているのである。<sup>(5)</sup>

(2) 「私は独房で、古いヘーゲル学派のイタリア人アントニオ・ラブリオラの有名な二つのエッセイを、夢中になって読んだ。彼は同時にマルクス主義者でもあり、フランス人として入獄したのであった。ラテン系の作家にはめづらしく、ラブリオラは、唯物弁証法を自分のものにしていった。政治面ではどちらかといえれば無能であったが、少なくとも歴史哲学の領域では、有力であった。その叙述のはなばなしいディレッタント、イズムのかげには、真の深さがあった。……」

……アントニオ・ラブリオラのエッセイは、哲学的諷刺論文といった性格をもっていた。私のもっていない知識を前提としていたので、多くの推量で補わなければならなかった。ラブリオラの本を読みおえたとき、私の頭の中には仮説の山ができていた。フリー・メイソンにかんする仕事は、私自身の仮説の価値を検証することに役立った。私は新しくなにも発見しなかった。私が達したすべての方法的結果は、ずっと前から見つかったものであり、ただそれが事実にも適用されたにすぎなかった。私は手さぐりで、或る程度は私自身の力で、そこに到達したのである。このことは、その後の私のイデオロギー的進化にとつて、重要な意味があったと思う。後になって、マルクスや、エンゲルスや、プレハーノフや、メーリングラの仕事のな

かに、私は自分が牢獄で単なる推量にすぎないと思ひ、さらに検証され、理由づけられる必要があると思つたものが、こゝとく、確認されているのを発見したのである。私は最初から、史的唯物論を教条主義的な形でわが物にしようとはしなかつた。弁証法はまず第一に、私の前に抽象的な定義としてではなく、生きた原動力としてあらわれたのである。私がそれを理解しようとして努力していかざり、それは歴史過程そのものに発見されたのである」（邦訳『わが生涯』、二三四ページおよび二三九―二四〇ページ、傍点―山本。……の部分は省略を示す）。

「古いヘーゲル学派——政治面では無能——歴史哲学——はなばなしいディレッタンティズム——こう並べてみただけで、トロツキーが傾倒しているラブリオラなる人物が真のマルクス主義者と名づけられるものとはおよそ縁遠いものであることがわかるし、「ラブリオラが唯物弁証法を自分のものにしてゐた」とか「歴史哲学の領域では、云々」とかいう、トロツキー自身の言葉そのものが、かえつて、トロツキー自身、唯物弁証法とはどういうものであるかをまったく理解してゐないことを、疑う余地なく示してゐる。したがつて、トロツキーがさかんにひけらかしてゐる「唯物弁証法」という言葉は、実はマルクス主義の基本となつてゐる本来の唯物弁証法とはまったくちがった括弧つきの、俗物的解釈による「唯物弁証法」を意味するだけのものである。これによつておのづから明白となる。そして、このようないわばニセモノの「唯物弁証法」をとらえているからこそ、「ブレハーフやメーリングラの仕事」のなかに、同じくニセモノの「史的唯物論」をいくらでも見つけることができるのである。

「史的唯物論を教条主義的な形でわが物にしようとはしなかつた」と言つて、「教条主義的な形」でやつてゐる連中と自分との「本質的差違」を強調してゐるのは、言葉そのものとしてはまことに立派であるが、しかし、ただこの立派な言葉を並べたてるだけでは、やはり、彼の師匠（＝ラブリオラ）ゆずりの「はなばなしいディレッタンティズム」を示すだけのものとなる。というのは、「ドグマティックな形で自分のものにしようとはしなかつた」ということは、事実によつて、つまり、史的唯物論を正しく適用し發展させたという實際上の労作をもつて実証されなければ、たんなる空文句にすぎないからである。トロツキー自身によつて「弁証法が生きた原動力としてあらわれ、また、それが歴史過程そのものに発見された」という、たいへん立派な言葉にしても、まったく同じことがいえる。實際に「生きた原動力」となつてゐる事実を、「歴史過程のなかに発見された」という事実を、はっきり示さなければ、これらはいずれも、たんなる自家宣伝用の空文句にすぎないものである。幸いにも、当面の彼の労作——『ロシア、社会民主主義派の發展諸傾向』——は、現実の歴史的發展過程をとりあつてい

るものであり、しかも、その歴史過程は、彼のもっとも得意とする、一九〇五—一九〇七年ロシア第一次革命を中心として展開されているものであるので、彼が、いかに「史的唯物論を、教条主義的ではなく、もっとも正しい形で自分の物としている」か、彼にとつていかに「弁証法が生きた原動力」となっているか、ということも、その中ではっきりと示されているであろうし、また、その「弁証法」なるものが、生きた現実の歴史過程のものなかにいかに発見されているかということについても、すばらしい実例が御本人によって提供されるにちがいないものと、大いに期待されるのである。

(3) 前出、二四七ページ。このように、トロツキーは、自分はすでに一九〇八年に「マルクス主義を自分の世界の概念および思考の方法の決定的な基礎」としていたと、はっきり書きたてておられることを忘れない。つまり、このたつたひとつの、りっぱな文章によって、トロツキー自身が一九〇八年から以後ずっと一九二九年まで「マルクス主義」を自身の「世界の概念および思考の方法の決定的な基礎として」いて、その間、その「マルクス主義」から逸脱することはありえなかったものだということを読者に、それとなくのみこませようとしているのである。しかし、右のりっぱな文章も、やはり客観的事実によって実証されなければ、自家宣伝用の空文句にすぎないということにならざるをえない。さしあたり、一九〇八年から十年以上もたつて、彼がことさら特別のテーマで外国党機関誌にとくに寄稿した前記の論文の内容をこれから吟味する機会に恵まれているので、この論文の内容そのものを正確に読みとることによって、またそのためにぜひとも必要となるトロツキー自身の実際の活動を系統的に跡づけるという試みをはたすことによつて、右のりっぱな文章の真実の客観的意義も、おそらくは適切に把握されることとなるであろう。それはまた、同時に、彼が毎度のこと書きたてている「マルクス主義」という用語についての、彼独自の用法についても、いちだんと深い理解をうるもつとも確実な材料を提供するものと考えられるのである。

(4) 前出、二七六ページ。すでに注(2)および(3)によつてもうかがわれたところであるが、トロツキーはその自伝の中で、自分は一九〇八年いらい終始一貫マルクス主義を完全に体得した真正のマルクス主義者として申し分なく実践してきたということがおのずから読者の頭に刻みこまれるように、様々のりっぱな文章をば必要に応じて随所にちりばめるという手数をかけているが、この『資本論』についての記述は、トロツキーの旺盛な「創作的意欲」をもつてしてもなお、巨匠マルクスの世紀的傑作の大きさはついにとらええなかつたものであるということを示して、まことに興味深いものがある。トロツキーは、『資本論』に没頭していたけれども、二巻までしか読まなかつたことなどを話した」と記している。おそらく彼トロツキーは一九二九年にこの文章を綴っていたとき、『資本論』というマルクス主義文献のうちの最重要の、難解な「聖典」を二十

才そこそこの若冠ですでに読破している自分が、他の凡庸ないわゆる「マルクス主義者」どもを抜いてその上にかに高く立っているものかということ、それとなく示そうという「創作意欲」にとらわれたものと考えられる。「資本論」を第二巻まで没頭して読んだ」ということが、彼トロツキーの眼にはまことにすばらしい「マルクス主義者」として映っているのである。だが残念なことに、『資本論』という科学的理論書は、文学的な「創作」作品とは根本的にちがって、全三巻を読まなければ、そして全三巻がまさに「渾然一体」をなしているものであることを正しく理解しなければ、読んだことにはけっしてならないのである。たとえば、世間にはよく第一巻第一章第一章だけをとりえてこれを「価値論」であるとし、第一章をよく読めばそれで「価値論」は十分理解されるものであると考えたり、またそのように主張している「資本論学者」もすくなくないようである。だがこういう考え方や主張は、およそ科学とはどういふものであるかということと真剣に考えることなく、したがって『資本論』を科学的理論の書として把握することができないものだということを、ことさら自己暴露しているにすぎない。価値および価値法則についての正しい全面的な、したがってまたもっとも豊富・具体的な理解は全三巻の全体的な組み立てをしかりとらえ、第三巻の「地代の法則」まで論理一貫して把握したときに、ただそのときにはじめて得られるのである。この全体的な組み立てを確実にとらえないでは、たとえ全三巻をとらえて何度読みかえそうとも、その内容は正しく理解されることなしに終るのが必然である。いわんや、トロツキーのように、第一巻と第二巻を読んだだけというのは——たとえ主観的にはどのように「没頭」しようとも——客観的にみれば、ただ第一巻と第二巻の文字面を眺めただけ、ということである。つまり、世にも有名な、そしてそれを読んだことがないといえはとうてい「マルクス主義者」の一人には加えてもらえないような、大『資本論』を手にとつて途中までかじりかけてやめたという、その辺でよく見かける自称「革命的マルクス主義者」がいつもやる手口そのままをくりかえしただけ、ということである。全三巻を読破してその全体的組み立てをしかりとらえるという熱意も骨折りも義務感もなしに、第二巻で放り出して置いて、さてひとにむかって『資本論』に没頭していた」などといふらすのは、まぎれもない形容矛盾をあえて犯すものであり、はなはだ意図的な大言壮語を示すものではない。だが、この自家宣伝的文句の客観的意義は、けっしてそれだけにはとどまらない、もっと重大なものがある。

第一に、第三巻を読まずにしまったということは、資本の現実の運動を規定する利潤についてなにひとつ理解しえないということ、したがって剰余価値と利潤との本質的な関連を、それゆえまた、剰余価値そのものの本質をまったく把握しえないということである。もちろん、決定的に重要な意義をもつ二つの法則——「平均利潤の法則」と「利潤率低下の法則」——について

は、完全な無知状態におかれる。さらに、資本家階級の「内部構成」についても、したがって「土地所有者」の経済的基礎についても知るところはなく、第三巻で展開されている「地代の法則」と「資本制的地代の発生史」についての無知は当然に、「農業問題」および「農民問題」についての無理解、混乱したとらえ方が、その頭脳を占める必然性をふくんでいる。レーニンはつねひごろ、トロツキーの根本的誤謬のひとつとして、「農民の役割の否定」ということをかならず挙げていたが、第三巻を読んで正しくこれを理解していなければ、「農民の役割」はただ「感性的」に感じとられるだけで、おのずからその「無視」にならざるをえないのは、けだし、理の当然であるといえよう。しかし、トロツキーは右のレーニンの批判を反駁して、それは「一方的独断」だといっており、この『資本論』一、二巻学者」のトロツキーをかたぎまわらずにはいられないわが国の同じく「マルクス主義的」エビゴーンなども口を揃えて「トロツキーは農民の役割を否定したり無視したりなどけつしてしていない」とけんめいに弁護これつとめている。レーニンの指摘が正しいか、トロツキーとその和製エビゴーンどもの反論が正しいかは、歴史的事実によつて的確に判断されるのであつて、幸いにもわれわれが当面しているトロツキーの論文は、ロシアの農民階級が偉大な役割を果たした一九〇五—一九〇七年第一次革命における階級闘争とこれを反映した「分派闘争」との歴史的分析をその基軸としているはずのもでなければならぬのであつて、そこには、当然「農民の役割」についても、いづれ行論においてトロツキーがもつとも得意とする「永続革命論」の内容を検討するさいに、おそらく動かしがたい的確な判断のための材料が十分見出されるにちがいないと予想されるのである。

第二に、ほかならぬ『資本論』こそが、「マルクスの理論のもつとも深遠な、もつとも包括的な、そして微細をきわめた確証であり適用」であり、かくして「マルクス主義の主要な内容」をなすものであることは、レーニンの指摘をまつまでもなく、動かすことのできない事実である。それゆゑ『資本論』を途中までかじりかけてやめ、その内容を読みとるだけの手数もかけえなかつたような人物は当然に、「マルクス主義の主要な内容」をなにひとつ理解していない者であつて、たとえ、その本人自身とその周囲の連中がこれを「真正のマルクス主義者」だと宣伝してまわろうとも、その者は似而非「マルクス主義者」にすぎないということになる。そして、もしその者が政治屋の感性でなにかの「理論」をみつけたとしたとしても、それは、所詮、「マルクス主義の主要内容」を「修正」するもの、反マルクス主義的理論でしかない、ということに必然的になる。この点についても、当面のトロツキーの論文は、貴重な材料であるといふことができるであらう。

(5) 前出、三八五—三八七ページ。ここには『マルクス・エンゲルスの往復書簡』がトロツキー自身にとってどんなに「血となり肉となつてゐる」かということが、その得意とする「創作」的表現によつてこまごまと綴られてゐる。だが、この名文もさきの『資本論』をかじりかけてやめた」という記事とつきあわせてみると、その「理論的」効果はもとより、その「芸術的」効果もいちじるしく減退せざるをえない。というのは、この『往復書簡』の内容は、その八五パーセントまでが、「マルクス主義の主要内容」である『資本論』に直接間接関連したものであるか、もしくは、その適用としての「プロレタリア的階級闘争の戦術」に関連したもので占められてゐるからである。つまり『資本論』をほんのすこしかじりかけて放りだしたような人物にとつては、『往復書簡』の全内容は最後まで「読みえない文字」でしかなく、こうした俗物的感性の持主のとらええたものといへば、つぎに見られるように、もっぱら「心理的啓示」だけということにならざるをえないのである。

「こうした状況にあつて、マルクスとエンゲルスの往復書簡は私にとつて如何なる書物よりも必要不可欠にして最も身近なものであつた。なぜなら、そこには私の思想ばかりでなく、私が世界について抱いてゐる知覚のすべて(!!)をもまた、偉大にして最も確実な方法(!!)で確かめることができたからである。ウィーンの社会民主党の指導者たちも、私と同じ公式(!!)を用いてゐた。だがしかし、われわれがその同じ概念のうちに全然異なつた内容をふくませていることを確かめるためには、これらの公式のどれでもないから(!!)、ほんの僅かでも応用させるかその軸のうえで(!!)、五度ばかりひねつてみれば(!!)充分であつた。われわれの連帯性は一時的であり、表面的かつ空しいものであつた。マルクスとエンゲルスの往復書簡は私にとつては理論的啓示ではなく(!!)、まさに一つの必理的啓示(!!)であつた。「常に同じ割合を保つて」(!!)各頁ごとに、私もこの二人の人間を結びつけてゐる精神的姻戚関係(!!)を確信するのであつた。彼らの人間や思想を考察する方法(!!)は私に身近かなものだつた。私は彼らが完全に述べてゐないことでも(!!)見抜いた(!!)。彼らの感情と憤りと憎しみをともにした(!!)。マルクスとエンゲルスは骨の髄まで革命家だつた。そのうえ(!!)、彼らのうちにはセクト主義や禁欲主義(!!)の影さえなかつた(!!)。二人とも、特にエンゲルスは、いかなる瞬間においても(!!)人間的なるもの(!!)の何一つとして彼らに無関係なものはないと言明することができた。しかし、彼らの神経(!!)を支配してゐる、広い革命的見識(!!)は、彼らに、いつも運命の浮沈(!!)や人間の仕業(!!)のうえに超越する(!!)ことを可能ならしめたのであつた。けち臭いこと(!!)は何ひとつとして、彼らと相容れないばかりでなく、彼らの存在する所には両立し得えなかつた。いかなる下劣さ(!!)も、彼らの靴の裏にさえ附着し得なかつた。彼らの評価も、彼の感動も、彼らの冗談や、ごくありふれたも



のまで、いつも一種の氣高い、純粹な空氣(!!)、精神的貴族性(!!)によって包まれていた。彼らは一人の人間に致命的な判定(!!)を加えることもできた、しかし、蔭口(!!)をいふふらしたりはしない。彼らは情容赦なく(!!)振舞えた。しかし裏切り(!!)はしない。およそ外的な華やかさのすべて、肩書き、位階、名譽称号、などに対しては、静かな輕蔑の念(!!)しか持たなかった。俗物や俗悪な連中が、彼ら二人のうちの貴族的精神(!!)と見なすものこそ、まさに、それだけが(!!)、彼らの革命家としての優越性(!!)をなすゆえんのものなのである。優越性(!!)の本質的性格というものは、いつでも、いかなる場合においても、公式の(!!)大衆的意見に対して絶対的に独立せる一有機体をなしていることである。彼らの書簡を読んでいると、その著作を読むよりも、(!!)、私は痛感させられたのだが、私をマルクス、エンゲルスの世界にたく結びつけているもの(!!)が、そのまま、私を和解の余地なくオーストリアのマルクス主義者に対立させるものであることを感じた(!!)。(傍点、ゴシック体および(!!)、(!!)はすべて山本のもの)。

マルクス主義文献の中でもっとも貴重かつ重要なもの一つといわれている『往復書簡』についてのこの記述は、いったい、マルクス主義者の筆に成るものであろうか、それとも鼻もちなぬ俗物的煽動政治屋の「ためにする」はったりの空文句の羅列であらうか？

「私が世界について抱いている知覚のすべて」とは、なにか？ いったい、「知覚」などという用語が、このさい必要であらうか？

「偉大にして最も確実な方法」とは、いったいなにか？ それと明確に示すことなしに、ただ「偉大」で「最も確実な方法」という言葉だけ並べたてるのは、マルクス主義的論じ方といえるだろうか？

「公式」というのは、いったい、なにか？ その「公式」を「その軸のうえで五度ばかりひねってみる」とは、いったい、どういうことか？ それで「充分」とは、どうしていえるのか？

「精神的姻戚関係」とは、いったい、どういうことか？ これは、はたして、マルクス主義的表現といえるか？ 「彼らが完全に述べていないことでも見ぬいた」とは、いったい、どういうことを「見抜いた」のか？ ただ「見抜いた」と書き立てるだけで、なにを、どこで「見抜いた」かを説明しないやり方は、いったい、マルクス主義者として適切なやり方といえるであらうか？

「彼らの神経を支配している革命的見識」とは、いったい、どういう見識か？ 「正しい論理的思考」でなくて「神経」を

問題にするとは、どういふマルクス主義的「見識」であろうか？

「外的な華やかさ、肩書き、位階、各誉称号にたいする軽蔑」を『往復書簡』によつてはじめて教えられたというのは、いったい、どういふマルクス主義者であろうか？

「セクト主義、禁欲主義、けち臭さ、下劣さ、蔭口」などが「真の革命家」にとつておよそ無縁なものであることが『往復書簡』ではじめてわかつたような人物、そしてまた、「一種の氣高い純粹な空氣」とか「精神的貴族性」に強いあこがれと執着をいだいているような人物、——これは、どういふ「革命家」といえるであろうか？

「マルクス主義の主要内容」をかじりかけて放り出しておきながら、「心理的」に、「心情的」に、あるいは、「神経」的に、もつとも身近いところにいると称して、それで、自分はマルクス・エンゲルスに「もつとも身近い」「真のマルクス主義的革命家」であるということ誇示したいという衝動をおさえきれないような人物、——これは、どういふマルクス主義者であろうか？

一方において、「世界について抱いている知覚のすべて」、「偉大にして最も確実な方法」、「公式」、「軸のうえで五度ばかりひねる」、「精神的姻戚關係」、「マルクス・エンゲルスが完全に述べていないことまで見抜く」、「神経を支配する革命的見識」、「一種の氣高い純粹な空氣」、「精神的貴族性」等々といった、内容のないはなばなしの空文句の羅列、そして他方において、「セクト主義」、「けち臭さ」、「下劣さ」、「蔭口」といった俗物的心理描写の羅列、——これが、彼トロッキーの手法、つまり、自分をマルクス・エンゲルスに「もつとも身近な」真のマルクス主義的革命家に仕立てあげ、同時に「論敵」をけち臭い似而非マルクス主義的革命家に仕立てあげるために愛用する手法であること、そしてそのために、貴重な『往復書簡』がひとつの「小道具」として利用されたものだということは、右の文章を「読んだだけでも十分思い知られるところである。この彼の愛用する手法が、当面の論文においていかに「効果的」に駆使されているかは、まもなくあきらかにされるはずである。

トロッキーの文章は、右の注記でもわかるように、きわめて、手の、こんだ、ものであつて、そのかくれた真意とその客観的な意義を読みとることは、けつして容易ではない。うわへの、まさに「鬼面人をおどろかす」て、いのはなばなしに眼をうばわれて、まんまと彼の手に乗せられてしまう初学者もすくなくない。そこでわれわれは、右にみたよう

な彼の特異な表現の「才能」なるものを十分念頭におきながら、歴史的事実との厳密な対比において、彼の論文がどのような内容のものであるかということ、的確に捕捉することにしたいと考える。

(一九一〇・一〇・一〇)